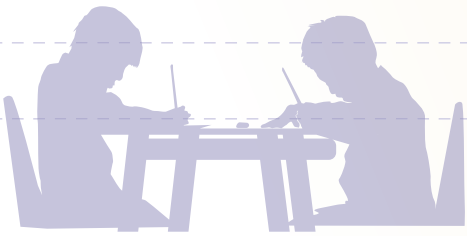
特集 「小６統一合判」中学入試レポート vol.1

保護者の意識と教育の変化から

多様化した入試にチャンスを見出す！

～2018年入試結果から探る、2019年首都圏中学入試展望～

皆さんの先輩にあたる受験生と保護者が、2018年の中学入試に親子で挑んだのが2月。すでに2ヶ月が過ぎた。今回は、新6年生になった皆さんが迎える、初めての「小6統一合判」テストだ。前回1月の「小5統一合判」（5年生最終回）のときには、「2018年入試をしっかり見据えて、親子で新たなスタートを！」と述べた。今回は、この2018年の人気動向から読み取ることができる、来春2019年入試の展望をお伝えしよう。



首都圏模試センター

首都圏の私立･国立中の受験者総数は4年続きで増加して、「45,000名」に！

今春2018年の首都圏中学入試は、前年に比べてわずかながらも受験生数が増加（約850名）に向かい、45,000名（首都圏模試推定による）の受験者総数となって、受験者数と受験率を示す下記のグラフは4年続きで右肩上がりとなった。

2008年のリーマン･ショック後、年々減少してきた中学受験生数は、2014年を境に上昇に転じ、増加傾向は来年にも引き継がれそうだ。

この増加の理由には、やはり「2020年大学入試改革と日本の教育の変化」がある。すでに2年後に迫った「2020年大学入試改革」以降の大学入試のあり方が変わるばかりではなく、今春からの小学校6年生以下の子どもたちが社会に出る2029年以降の日本の社会と人々の生き方は、現在とは大きく変化することが予測されている。

かつてアメリカの教育学者キャシー･デビットソン氏（当時ニューヨーク市立大学教授）は、「2011年度にアメリカの小学校に入学した子供たちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろうと予測し、マイケル･A･オズボーン氏（当時オックスフォード大学准教授）は、「今後10～20年程度で、アメリカの総雇用者の約47%の仕事が自動化されるリスクが高い」と予測した。

そして前者の言う「2011年度にアメリカの小学校に入学した」子どもたちとは、まさに昨春2017年4月から中学に入学した子どもたちなのであり、後者が予測した未来は、まさにこの世代の小学生が中･高･大学や大学院を卒業して社会に出る時代に他ならない。

今春2018年入試でも志願者を増加させた開成中の入試風景。

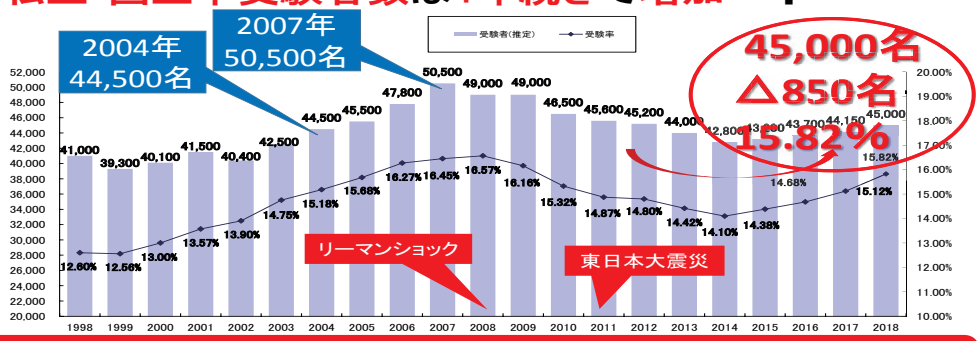
さらには、現在の中学1年生が40歳になる2045年頃には、シンギュラリティ（技術的特異点）という分岐点を迎え、「AI（人工知能）が人間を超える」時代が訪れるとさえいわれている。

急速に進むグローバル化、ボーダレス化とAI（人工知能）の進化によって、現代の子どもたちは今後「答えがひとつに定まらない」人類的な課題と向き合い、その解決の糸口を探っていかなくてはならない世代なのである。

そのように「今後（未来）の社会が変わり、そこで求められる力が変わり、大学入試も変わる」と言われる時代にあって、子どもたちがその時代をサバイブし、より良く生きていくための力を考えたときに、中学受験生の「学校選び」の観点も少しずつ変わってくるのは当然だろう。

2018年中学入試はどうなったか？

■私立･国立中受験者数は4年続きで増加へ！



ピーク時から徐々に減少してきた中学受験者数は、2014年を境に下げ止まり、2015年～2018年にかけて4年続きで続けて増加へ！

同時に、多くの私立中学校も、今後の「変わる大学入試と日本の教育」への対応の必要性から、自校の教育にもアクティブラーニングの導入や「21世紀型スキル」の育成を積極的に謳うようになってきた。

その傾向や方向性が中学入試にも反映されたひとつの側面が、今春2018年の首都圏中学入試でとくに目立つようになった「私立中入試の多様化」に他ならない。

小学生と保護者の選択肢を広げた私立中入試の多様化！

そうした今春2018年の首都圏中学入試で目立ったいくつかのトピックスを14ページのコラムでご紹介しておこう。

そこで紹介したトピックスは、いずれも最近マスコミでも度々話題にされるようになった「2020年大学入試改革」と「日本の教育の変化」につながる動きといってよい。

そしてそれは、若い世代となる現在の小学生の保護者（ミレニアル世代と呼ばれる）の志向や行動様式の変化を反映したものでもある。

この4月から小6になったお子さんたちの学年は、2020年度の大学入試改革から5年目を迎える2025年度の大学受験生。当初4年間は現行の英語入試と併用される「大学入学共通テスト」の英語も、この年からは民間英語検定への完全移行となる。こうした本格的な大学入試改革の最初の当事者が、この現在の小学校6年生の学年ということになる。

今春2018年入試から2月3日午後に新設された共立女子中「インタラクティブ入試」の「英語インタラクティブトライアル」の様子。

だからこそ、来春2019年入試でも、こうした動きはいっそう加速され、顕著なものになることが予想される。以下にそうした動きとその背景について述べていこう。

多様化した私立中の新タイプ入試は小学生の才能を評価するメッセージ

2017年～今春2018年にかけての首都圏中学入試では、1月の埼玉･千葉入試の時期から、東京･神奈川の私立中入試のスタート日である2月1日の直前～当日にかけて、多くのマスコミがいっせいに「私立中入試の多様化」に目を向けた。

この2～3年の間に、中学受験の「新市場拡大」のために、さまざまな形態の「新タイプ入試」が多くの私立中学校で新設･導入され、今年はそれが一段と増加したからである。

その私立中の多様化した入試の形態は、「適性検査型（公立一貫対応型）入試」をはじめ、「合科目･総合型入試」、「記述･論述型入試」、「PISA型入試」、「思考力入試」、「自己アピール（プレゼンテーション型）入試」や「英語（選択）型入試」など、バリエーションは多岐にわたる。それ以外にも「得意科目（1科･2科･3科）選択型」や、従来から存在した「帰国生入試」や「推薦･第1志望入試」などの増加も昨年以上に目立つようになった。今春から品川女子学院や大妻中野などで新設された「算数1科目入試」などが、その典型といえるだろう。

これらの新タイプ入試が導入されることで、進学塾で私立中受験のための勉強をしてきた受験生だけではなく、多様な学校生活や学習歴（習い事やスポーツなども含む）を経てきた小学生が、私立中を受験～進学するという選択ができる機会が広がった。

つまり、こうした多様なタイプの入試（＝多様な受験生を迎え入れることのできる入試）を、多くの私立中が、新たな受験生と保護者との“出会いの機会”として、また今後の日本の教育や大学入試の変化に対応した自らの教育姿勢を反映する“メッセージ”として導入するようになってきたのである。

せっかく私立中学校側が、そうした新たな受験機会を設けてくれたのであれば、受験生（小学生）と保護者は、自身（わが子）の得意な教科や強みを生かして、それに合った入試を実施している私立中に、自信を持って挑戦していけばよい。

そうした意味では、この「日本の教育と大学入試」が大きく変わろうとしている時期に、この変化を受けて、中学入試で問われる学力観や入試観そのものも変化したことから、入試形態も多様化したと理解すればよいだろう。多様な学力や才能を持つ小学生にとって「チャレンジできる機会が広がった」とポジティヴに受け止めてよいはずだ。

現にこうした多様な新タイプ入試を新設･導入した私立中高一貫校の先生方は、一様に「これまで以上に多様な受験生（小学生）と出会うことができ、記述答案の文章や活動歴、プレゼンテーションなどから、多くの小学生の豊かな資質と“伸びしろ”を感じることができた」と、その確かな手応えを語っている。

「2020年大学入試改革」が若い保護者には歓迎された！

こうして現在の小学生と保護者の前には、すでに2年後に迫った「2020年大学入試改革」による大学入試の変化（＝日本の教育の変化）という大きな問題が生じている。

今春の中学入試では、この大学入試改革による先行きの不安から「大学付属校の人気が高まった」などということも一部で言われてきた。しかし、この「大学付属校人気」の背景には、むしろ大学受験の準備（受験勉強）にとらわれることなく、アクティブラーニングや多様な体験学習などに時間をかけられる大学付属校が、現代の保護者に歓迎されたという面が大きいだろう。

今春２０１８年入試から２月１日午後に新設された聖セシリア女子中「Ｂ方式／グループワーク型読解・表現入試」の様子。

今春２０１８年入試から２月４日に新設された聖学院中「難関思考力入試」の様子。レゴブロックを使って自分のアイディアを作品化し、その考えを記述する。

同じように、今回の大学入試改革と日本の教育改革の方向性が、これまで触れてきた現在の小学生の若い（ミレニアル世代の）保護者には、思った以上に歓迎されているという側面も見逃すことはできない。

何より知識を吸収することが重要で、それが思考力･応用力を高める大前提と考える旧来の「学力観」や、従来のような根強い「学歴信仰」を持たない新たな保護者層には、これまでのように「知識の正確さ」を問われる大学入試よりも、むしろ「思考力･判断力･表現力」や「主体性･多様性･協働性」が問われるという今後の大学入試のあり方が歓迎されたという見方もできる。

さらに各大学での個別入試では「創造性･独創性･芸術性」までを求めるという、今後の大学入試のあり方に賛同する人がすでに数多く存在するという印象さえ受けるのだ。

そうした若い保護者の多くは、自らグローバル企業やビジネスの第一線で活躍する働き盛りで、今後の大学入試や新たな教育で求められる上記のような力こそが、これから必要な時代となっていくことを肌で感じている世代でもあるからだ。

2年後に控えた「大学入試改革」が、当初の予定より失速したとか、本格的な改革として実現するのは遅れそうだといった否定的見解は、むしろ今後の小学生の若い保護者にとっては問題ではなく、「わが子が社会で生きる」10数年後

2018年の首都圏中学入試トピック！《第1弾》

～「2020年大学入試改革」に先駆けて、中学入試の人気動向に「変わる大学入試と日本の教育」の影響が反映！～

今春2018年の首都圏中学入試で目立った動きと傾向を以下にご紹介しておこう。

《 2018年入試の全体的なトピックス 》

1．最難関校への強気のチャレンジ～４科目の受験生は、一段と高い目標に挑んだ！～

開成や女子学院、栄光学園、慶應義塾普通部、早稲田、早稲田高等学院など、首都圏の最難関私立中の志願者が増加。4科目を2～3年かけて進学塾で勉強してきた成績上位生の多くが、高い目標に向けて強気でチャレンジしていく傾向が見られた。

2．有名大学付属校の多くが人気増加！～2020年大学入試改革が付属校人気に反映！～

事前の予想通り、慶應義塾大学、早稲田大学をはじめ、MARCH５大学、学習院大学、日本大学、東海大学など、有名大学の付属中学校の多くが人気を高めた。2020年の大学入試改革を2年後に控え、中学受験時から大学付属校を好む傾向が目立った。

3．『思考力』『表現力』を問う出題が増加！～ここにも大学入試改革の方向性が反映～

今年の出題には、2020年以降の大学入試で求められる「思考力・判断力・表現力」を問う出題が増加。開成中の国語では、まさにそういった傾向の問題が出題。ほかにも、麻布、海城、慶應中等部など多くの私立中で、「考える力」、「自分の言葉で表現する力」が問われた。

2018年 私立中「適性検査型入試」の受験者数

2月6日現在集計（一部推定）	実受験者数（名）	志願者数（名）	実受験率（%）
首都圏全体	9,484	11,991	79.1%
2/1AM入試校	3,773	3,901	96.7%

私立中の「適性検査型入試※」を実際に「9,484名」が受験！
※総合型・論述型・思考力型・PISA型・自己アピール（プレゼン）型入試を含む

2018年 私立中「英語（選択）入試」の受験者数

2月6日現在集計（一部推定）	実受験者数（名）	志願者数（名）	実受験率（%）
首都圏全体	1,378	2,381	57.9%
2/1AM入試校	156	177	88.1%
2/1PM入試校	196	247	79.4%

私立中の「英語（選択）入試」を「1,400～1,500名※」が受験！
※2/6時点で「英語（選択）入試」の志願者数・実受験者数の内訳を未公表の入試は含まず

4．私立中の『適性検査型入試』が136校に！～変わる大学入試→私立中入試の多様化～

首都圏の私立中では、公立中高一貫校の適性検査の出題に共通する「その場で考え、表現する」力を問うタイプの「適性検査型入試」が、前年の120校から16校増えて136校に増加（ここには「総合型」「合科論述型」「思考力型」「自己アピール〈プレゼン〉型」「アクティブラーニング型」など多様な入試も含む）。

5．私立中の『英語入試』は112校に！～今後の世界で必要な『英語力』を保護者が意識～

今春2018年入試では、「英語入試」を実施する学校も、前年の95校から112校に増加。 2020年からの小学校での英語の教科化に先駆けて、英語の４技能が試される今後の大学入試の変化と、グローバルな社会で求められる英語力の必要性を保護者が意識。幼少時から英語学習に励む子どもの増加傾向も反映。

6．中学受験者数は4年続きで増加へ！～多様な入試にチャレンジする小学生が増加～

今春の首都圏中学入試では、私立･国立中学校の受験者総数が、前年の4万4千150名から約4万5千名（推定）まで増加。公立中高一貫校の受検生を加えると、約5万8千名（小学校6年生のおよそ5人に１人）が中学受験（受検）に挑んだことに。2020年の大学入試改革が近づく来年以降は、さらに中学受験率は高まることが予想される。

を想定して、すでに“その先を見つめる”保護者が増えていると考えるべきだろう。

カギを握る アクティブラーニングの成否

そして現在の小学生が高校を卒業するときまでには、間違いなく大きく変化するとみられる大学入試と日本の教育において、そこに向かう教育改革の方向性のもとで求められている喫緊の課題が「アクティブラーニング」の導入だ。このアクティブラーニングの定義や解釈が一時は盛んに論議されてきたが、この是非についての論議も、ミレニアル世代の保護者には無用な

のかもしれない。

今後の教育の変化に現在の小学生の若い保護者世代の多くが期待することは、「わが子が楽しく、主体的に学びに取り組めるのならば、それに越したことはない」ということだというのが、率直な感覚･感想なのではないだろうか。

たとえば10数年前の中学開校当初から、「探究学習」を重視してきた埼玉のある私学の理事長は、「勉強が嫌いな子どもという表現があるが、そういわれてきた子どもは従来の一方通行型の講義になじまないだけ。『授業が楽しい』と思えれば変わる！」とか、さらには「アクティブラーニングの最大の効用は、同じ教室の友達との意見や考えの違いを認め合うことで、互いに『自己肯定感』が高まること」と明言している。

実はこうした考えに反対する小学生の保護者は少なく、否定的意見を述べているのは、大半がそれより年上の、すでに子育てを終えた世代の教育関係者ばかりだといってもいい。

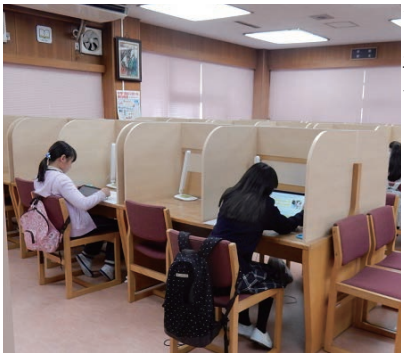
もちろん、最近ではどの学校もアクティブラーニングの導入を謳うようになったことから、どこの学校が本当の意味での主体的･能動的な学びのスタイルを実践できているのかわかりにくい面もある。

それを見極めるために、なるべく多くの私学に足を運び、保護者が自身の目でそれを判断することが、「学校選び」にあたって大切な時代になってきているのだ。

ICT教育にはまったく違和感を持たない親世代

アクティブラーニングと同様に、いま教育現場での喫緊の課題とされる「ICT教育」の導入についても、現在の小学生の若い保護者世代と、それ以前の世代とでは受け止め方が少し違ってくる。

ミレニアル世代の保護者は、すでに高校生～大学生の頃から、世の中にPCが広く普及し始め、携帯電話も普及した時代に学生時代を過ごしてきた世代。Web（インターネット）利用は当たり前。社会人になってからはノートPCやモバイル機器も普及し、やがてはスマートフォンやタブレットを何ら抵抗なく使いこなすようになった世代でもある。



2017年入試から新設されて2年目を迎えた日本大学豊山女子中の「思考力型入試」の様子。提示されたテーマから自分で選んだ内容をタブレットや本で調べて画用紙にまとめ、各自がプレゼンテーションする。

そしてその子どもたちである現在の小･中･高校生のスマホ普及率は、全国的にも80%を超えたとさえ言われている。

仕事でもプライベートでもPC、スマホ、Webを日常で使ってきた世代の保護者であるがゆえに、中学入試の世界にも、一気に「Web（インターネット）出願」システムの導入校が増加し、今春2018年入試では、首都圏の私立中の過半数の180校以上がそれを導入し、多くの受験生の保護者に歓迎されているという事実は、その世代変化を反映したものだと言える。

そうした世代の保護者が、中高一貫校での「ICT教育」の導入に理解を示さないはずはない。リアルタイムで情報を共有し、教室での学びのなかでもクラスの仲間の意見や考え、作品などを瞬時にシェア～共有することで、アクティブラーニングを速やかに進めるための手段･道具として、わが子がそれを使いこなすことに抵抗感を持つ保護者は、ほとんどいないか、いたとして

今春2018年入試から新設された宝仙学園共学部理数インターの新入試「理数インター」の様子。同校の授業にも導入されている新教科「理数インター」のアクティブラーニングを入試当日に体験！

来春2019年の入試トピック！《第1弾》
～細田学園、大宮国際中等教育学校、が新設開校！～

■細田学園〈埼玉･志木市。共学校〉が中学校を新設開校

細田学園〈埼玉･志木市。共学校〉は、募集定員120名で中学校を新設開校します。

同校は、東武東上線「志木駅」から徒歩12分。東京都内からも通学しやすい立地のキャンパスに、2015年に完成した新校舎をはじめ近代的な教育環境を整えています。学園の創立100周年に向けて来春開校する中学校では、新たな教育を展開する意欲十分です。

入試日･科目などの詳細は、同校公式サイトでの公表をご覧ください。

■さいたま私立大宮西高等学校を母体に、大宮国際中等教育学校が開校！

埼玉県さいたま市では、既設のさいたま市立浦和に続く2校目の公立中高一貫校の開校が早くから公表されてきました。それが、市立大宮西高等学校〈さいたま市。共学校〉を母体として来春中学校を開校し、「IB（国際バカロレア）プログラム」による教育を展開する大宮国際中等教育学校です。

同校は、大宮駅からバス15～20分の立地。最寄り駅からはやや距離がありますが、埼玉県内では、昌平中高〈埼玉･北葛飾郡杉戸町。共学校〉に続く県内2校目の「IB（国際バカロレア）認定校」をめざし、新たな教育を展開することが公表されていることから、そうした“世界標準の”教育に期待する小学生と保護者層からの注目を集める可能性が大です。

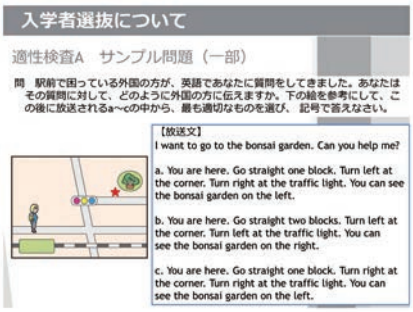
同校のWebサイトでは、すでに昨春から「適性検査」のサンプル問題が公表されていますが、そのなかには英語の出題も含まれていることなども注目されています。

■ドルトン東京学園中等部・高等部が調布市の新キャンパスに移転・開校

もうひとつ、東京都内には、ドルトン東京学園中等部･高等部〈東京･調布市入間町。共学校〉が、来春2019年の開校に向けて、現在認可を申請しています。

小田急線「成城学園駅」から小田急バスで約6分、京王線「仙川駅」から徒歩20分、同「つつじが丘駅」から小田急バスで約12分の立地のキャンパスに、現在新校舎を建設中で、完成すると素晴らしい教育環境が整います。

現在は目黒区に位置する東京学園高等学校の一大教育改革として、「自由」と「協働」の2つの原理に基づく教育メソッド「ドルトンプラン」による教育を展開する、新たな私立中高一貫校として期待･注目されています。


入学者選抜について

適性検査A　サンプル問題（一部）

問　駅前で困っている外国の方が、英語であなたに質問をしてきました。あなたはその質問に対して、どのように外国の方に伝えますか。下の絵を参考にして、この後に放送されるa～cの中から、最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

【放送文】
I want to go to the bonsai garden. Can you help me?

a. You are here. Go straight one block. Turn left at the corner. Turn right at the traffic light. You can see the bonsai garden on the left.

b. You are here. Go straight two blocks. Turn left at the corner. Turn left at the traffic light. You can see the bonsai garden on the right.

c. You are here. Go straight one block. Turn right at the corner. Turn right at the traffic light. You can see the bonsai garden on the left.

来春2019年入試から開校するさいたま市立大宮国際中等教育学校のウェブサイトで公表されている「適性検査サンプル問題」には、英語の出題も含まれている。

もごく少数だろう。

むしろ保護者世代が携わるビジネスの世界では、そうした道具を使って互いに理解を速やかに深める力や技術が求められている。

私立中高一貫校のなかには、すでに生徒一人に一台のタブレット（iPadなど）を持たせ、しかも学内無線LANによる利用に限られたWiFi型ではなく、登下校の途中や自宅でも使えるセルラー型のiPadをあえて持たせる学校も登場していることに注目したい。

「21世紀型スキル」の育成は時代の要請

この2～3年でとくに注目されるようになった「21世紀型教育」も同様に、現在の小学生の若い保護者世代からは歓迎されている。

この「21世紀型教育」を私学のなかでも最先端のレベルと充実度で実践する三田国際学園が、共学化から3年続きで今年も大きな人気を集め、ついに2017年には学校別の「のべ志願者数増加順ランキング」でもトップになった。同校は今春2018年入試でも変わらぬ高い人気を集め、入試の難易度も確実に上昇した。そうした傾向は来春以降も、ますます加速するだろう。

いまのところ日本国内で「21世紀型教育」という表現で新たな教育の導入～実践を真正面から謳っているのは、「21世紀型教育機構（旧･21世紀型教育を創る会）」に加盟する10数校の私立中高だが、そのほかにも「IB（国際バカ

来春2019年の入試トピック！《第2弾》

■日出中･高が日本大学の準付属校となり、目黒日本大学中学校･高等学校に！

日出中学校･高等学校〈東京･目黒区。共学校〉が、昨年末に日本大学の準付属校となり、校名を目黒日本大学中学校･高等学校と改称して、新たなスタートを切ることが3月末に公表されました。

JR山手線･東急目黒線･東京メトロ南北線･都営地下鉄三田線「目黒駅」から徒歩3分というアクセスの良さに加え、2014（平成26）年末には建学110周年の記念事業として新校舎も完成。さらに日本大学という総合大学の教育リソース、大学への推薦進学権などが加わることで、通学可能なエリアの大学付属校ファンからの注目を集める可能性があります。

来春2019年入試からは、日出中高から目黒日本大学中高と校名を改め、日本大学の準付属校となって再スタートを切る！

■横浜富士見丘学園が共学校に。中･高の分離で高校募集も今春再開！

横浜富士見丘学園中等教育学校〈神奈川･横浜市。女子校〉は、この2018年から横浜富士見丘学園中学校と高等学校に分離し、高校からの新入生募集を開始していましたが、創立100周年に向けた教育改革として「21世紀型教育イノベーション」を進めていくことを公表。

そして来春2019年からは、共学校化して新たなスタートを切ることになりました。さらには、東京理科大学との教育提携も計画されているといいます。

来春2019年の入試要項や男子の受け入れについての詳細はまだ公表されていませんが、この数年、再開発などによって活気を増す二俣川エリアで、中高募集とも注目を集めることが予想されています。

■今春2018年から共学化した3校が、春から男子を迎え入れて再スタートへ！

横浜富士見丘の共学校化に先駆けて、今春2018年4月からは、東京で2校、神奈川で1校の私立中が共学校化して、入試でも注目を集めました。

神奈川では、2014年から青山学院大学の系属校となり、2016年からは校名も青山学院横浜英和と改めた旧･横浜英和女学院中学校･高等学校〈神奈川･横浜市。女子校〉が、今春2018年からは共学校化。この4月から男子生徒を迎え入れて、新たな歴史をスタートさせました。

東京では、八雲学園中学校〈東京･目黒区。女子校〉、も同じく今春2018年から中学を共学化。文化学園大学杉並中学校･高等学校〈東京･杉並区。女子校〉も今春2018年から共学校化しました。

この3校はいずれも母体が女子校のため、共学化初年度はやはり男子生徒の入学者は女子の3割前後にとどまりましたが、今後は共学校としての認知度が高まることで、男子の人気を高めていくことが予想されています。

とくに青山学院横浜英和は、この1～2年の大学付属校人気もあり、男子生徒からの人気は間違いなく高まっていくことでしょう。

また、八雲学園、文化学園大学杉並の両校は、ともに私立中高一貫校のなかでも出色ともいえる本格的な英語教育、グローバル教育を展開しており、男子の中学受験生と保護者の学校選びの観点にも、そうした要素が大きなウエイトを占めるように変化してきたことから、来春2019年入試では、さらに男子受験生の人気を高めることは間違いないでしょう。

ロレア)」や「ダブルディプロマ」などの“世界標準の”教育プログラムを導入したり、そうした学びの要素を自校のオリジナルな教育に取り入れ、新たな学びのスタイルの導入に踏み出している私学は数多い。

そもそも、欧米では「21世紀型スキル」という表現がすでに教育の世界でも当たり前のように使われているにも関わらず、日本ではまだ“少数派”にとどまっていることの方が、むしろ不思議なことといえるだろう。

先進国の技術や文化を導入することで国力を高める、いわば“キャッチアップ型”の教育が求められたのは、すでに過去のこと。今後は「正解がひとつに定まらない問い」について、多様な国々の多様な意見を持つ人々と話し合い、協調･協働して、環境保護やエネルギー不足、紛争や貧困の撲滅、持続可能な社会の構築といった、世界的な課題の解決の糸口を探っていける力が、未来を生きる子どもたちの世代には求められている。

そういう「21世紀型スキル」の育成は、教育の現場における世界的な課題であり、“時代の要請”であると考えておくべきだろう。